

## 資料室だより 144

ヴリーゲン蔵書（4）

今回はフランドル楽派の作曲家個人研究を紹介しましたが、今回は個別研究ではなく楽派研究です。

### 1. Ch. Van den Borren: Geschiedenis van de Muziek in de Nederlanden, Deel 1

Antwerpen, De Nederlandsche Boekhandel, 1948 （オランダ語）

タイトルの通りネーデルランド音楽史です。現在では「フランドル楽派」という呼び方が一般的になっています。フランドル地方出身の音楽家たちが大活躍したのは15～16世紀にかけてですのでこの書も中世から説き起こしてラッソまでを範囲としています。第一部を中世として、音楽理論、グレゴリオ聖歌、世俗単旋律歌謡を述べ、第二部ではブルゴーニュ楽派としてデュファイ、オケゲム、ジョスカンとその同時代人たちを述べていますがその中にはラリーユ、フェヴァン、ブリューメル、アグリコラ、コンペール、などわたしたちがフランドル楽派として認識している作曲家たちもふくまれています。そして第三部のルネサンスはウィラールト、ゴンベール、クレメンス・ノン・パパ、ローレ、そして最後にラッソー、モンテがきます。この中でも細かく時代区分されておりますので一時代前のフランドルの音楽学者によるフランドル楽派の時代様式のとらえ方を知ることができます。

### 2. Eugeen Schreurs: Het Nederlandse polyfone Lied, Peer, Alamire. 1986 （オランダ語）

これはオリジナルの譜例を中心にした興味深い著作です。国際様式化したフランドルの技法がドイツ、イタリア、スペインなどでどのように定着していったかを細かく時代区分しながら述べています。例えば「1480年から1520年までのイタリア、スペインにおけるフランドル・ポリフォニー」のように。フランドル楽派に特化し、それを核とした視点の音楽史学書です。

### 3. Ignace Bossuyt: De Vlaamse polyfonie. Leuven, Davidsfonds, 1994（オランダ語）

この書は「フランドル」(Vlaamse) というタームを用いておりますので音楽史研究の新しい世代の書です。カラー刷りの図版がふんだんに使われ、フランドル楽派全体、全ジャンルを網羅した楽しい読み物になっています。楽譜の図版だけではなく美術も豊富にありますのでフランドルの世界全体を感じることができます。またインデックスが充実していますので特定のタームや曲名から検索するにも便利です。

### 4. James Haar(ed.): Chanson & Madrigal 1480-1530; Studies in comparison and contrast;

A Conference at Isham Memorial Library, September 13-14, 1961 Harvard Uni, 1964(英語)

これもフランドル楽派のカテゴリーに入ります。タイトルの通り会議録になっています。

序文をグスタフ・リースが書き、登壇者もハワード・メイヤ・ブラウン、ダニエル・ハーツなど60年代を代表する代表的なルネサンス音楽史家たちです。この50年にフォーカスしてシャンソン、マドリガーレを論じています。ここで扱われている楽曲48曲の譜例が巻末に収録されているのも大変ありがたいです。

#### **5. Hugo Leichtentritt: Geschichte der Motette, Wiesbaden, Breitkopf, 1967 (ドイツ語)**

音楽史の大家ライヒテントリットのモテット史です。モテット前史にあたるいわゆるフランスのモテトゥスからはじまり、フランドルを第一期、第二期と分け、ジョスカンとラッソーを個別に章を与えて立項しています。パレストリーナ、モンテヴェルディを経て、その後は国別にドイツ(シュッツからバッハ)、スペイン(モラーレス、ゲレーロ、ビクトリア)、フランス(セルミジ、ル・ジュンヌ、デュ・モンなど)、イギリス(タリス、バード、ターヴァナーなど)、そして最後にバッハ時代が来ています。バロックにいたるモテット史をシステマティックに概観しています。

#### **6. Lewis Lochwood(ed.): Palestrina Pope Marcellus Mass, New York, Norton, c1975(英語)**

これはNorton Critical scoresのシリーズで大変興味深い1冊です。パレストリーナの有名な「教皇マルチェルスのみサ」をめぐる諸問題と楽譜です。まず彼の伝記のあとにこの曲に関する同時代人達の言及を集めています。そのなかには今は聖人となっているミラノの司教カルロ・ボロメオもおります。それからイエッペセン他による作品の分析があり楽譜全曲の校訂があり、最後に後の時代の評価、ベートーヴェン、ワーグナーやヴェルディなどの評価も所収され、この作品の音楽史全体における意義付けがなされています。

#### **7. Muziek aan het hof van Margaretha van Oostenrijk, Jasarboek van Vlaamse centrum voor oude muiek, Jaargang III, Peer, Musica Alamire c1987**

マルグリット・ドートリッシュは神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世の娘としてブルゴーニュで生まれ、傑出したハプスブルク家の女性です。ネーデルランド17州の総督も務め、後のスペイン国王カルロス1世(皇帝カール5世)の養育もゆだねられます。そのようなマルグリットは音楽家のパトロンでもあり、ブリュッセルのMS,228およびMS11239で知られるAlbum de Marguerite d'Autricheのファクシミリとそれをめぐる論集が今回の寄贈本のなかに含まれています。フランドル文化のただなかに生きたマルグリットの名を冠したこの曲集はラリーユ、オケゲム、ブリュームル、アグリコラなどルネサンス時代の大家のアンソロジーとして比類のない曲集でしょう。両MSのファクシミリ・エディションも共に寄贈されました。

(杉本ゆり 記)